

第29回

第4章 国際社会に生きる日本人としての自覚

日本人の宗教観と倫理観

今回学ぶこと

日本人の宗教観と倫理観の特色とその現代的意義について考える。日本人は自然を神聖なものと感じ、自然の背後に神々が存在すると考えてきた。また、世界を支配する究極の神を置かずに、多くの神々やさらには私たちへの信仰を共存させてきた。また自然の清らかさを理想として、人間もまた汚れのない心で生きなければならぬと考えた。



講師

田中久文

■■ 神々の共存 ■■

日本人の多くは自分を無宗教と考えているといわれるが、しかしいまだに初詣や夏祭りなどで神社や寺院に参詣する人は少なくない。日本人が信仰する宗教は、特定の開祖や教義に基づくものというよりも、慣習やしきたりとして生活と密着した自然宗教といわれるようなものである場合が多い。

自然の背後に神聖な力を感じてきた日本人にとって、「^{やおよろず}八百万の神々」といわれたりもするように、山にも海にも神々はたくさん存在する。しかし、そのなかに究極の神というものは存在しない。『古事記』をみると、天上にある神々の世界である「^{たかまがはら}高天原」を支配している^{あまてらすおおみかみ}天照大神でさえも究極の神とはされていない。

このように究極の神を置かないという考え方は、他の宗教と激しい対立をもたらさないということにもなった。新たに入ってきた仏教とも「神仏習合」という形で共存していくことができたのもそのためである。

■■ 重層的文化 ■■

今でも古い家に行くと、神棚と仏壇が両方ある場合が少なくない。日本人は長い間、日本古来の神々と、仏教の仏たちとをあまり明確に区別せずに、一緒に信仰してきたのである。そこには宗教間の対立をなくそうとする知恵がみられるといえよう。

宗教にかぎらず、古い文化と新しい文化とが重なりあって共存しているということは、日本の文化全般の特徴でもある。たとえば、室町時代以来の能・狂言、江戸時代以来の

歌舞伎、明治以来の西洋的な近代演劇などが、現在でも共存し、それぞれ多くのファンがいて盛んに上演されている。

このように、過去の文化を捨てずに温存し、外来の文化を排斥せずに包摂して、多様な文化が共存しているあり方を、和辻哲郎は日本文化の「重層性」とよんでいる。ただし、そこには、多様な文化が「雑居」しているだけで、雑然とした文化となってしまうという危険性もひそんでいるといえよう。

■ ■ 「清き明き心」の伝統 ■ ■

古代の日本人は、善い心を「キヨキココロ」「アカキココロ」とよんだ。それは自然の清らかさを理想としたもので、心の底まで透き通った状態のことである。そこから「清き明き心」「清明心」を良しとする伝統が生まれた。それに対して、悪い心を「キタナキココロ」「クラキココロ」とよんだ。古代の人々は、悪というものを内面的なものと考えずに、外から付着するものと考えた。したがって、それは水で洗い清める行為としての「ミソギ」などによって取り除くことができるものとされた。

「清き明き心」の伝統は、その後「正直」というものを尊重するという形で受け継がれた。江戸時代の石田梅岩は、商売には「正直」が最も重要だとした。また、儒教の影響のもとで「誠」という徳目を重んじるという傾向も生んだ。幕末に活躍した吉田松陰は「至誠」によって国の政治も動くと考えた。

◆ コラム ◆

日本人に「あなたは何か宗教を信じていますか？」という質問をすると、多くの人は無宗教と答えるそうです。しかし、それは宗教というものを「創唱宗教」（開祖がいて体系的な教義や聖典のある宗教）としてしか考えていないからです。現在でも多くの日本人が、初詣やお祭りやお墓参りで神社やお寺にしばしばお参りしますよね。これらは宗教的行為以外の何ものでもありません。その意味では、今でも日本人はとても宗教的だといえるのではないのでしょうか。